

忍んできた夜

ゝ
体
験
版
ゝ

白澤 SIDE

やはり昼間渡した薬に、暗がりになると催淫効果を發揮する調合薬を染み込ませていただけの効果はあった。

汚れの見えない薄桃色の鬼灯自身を近くで眺めると、少し濡れているのがわかった。腰のすぐ横には、掌を返した鬼灯の手があり、そこもわずかに指先が濡れているように見て取れる。

（もしかして、自分でしてた？）

それならおかしい。鬼灯自身は射精した様子もなく、切なげに半分立ち上がったままだ。先端をよく見ると、先走りが伝落ちた跡がある。

自らを慰めていて、その途中でそのまま寝込んでしまったと考えるのが妥当だが、白澤はピンときた。

（こいつ、起きてるな・・・？）

おそらく暗がりになって急に発情し、たまらなくなつて自慰を試みていたところ、白澤の物音で人の侵入に気づき、とつさに布団だけをかぶつて取り繕つたのだ。

まさか相手が布団を捲ってくるなどという行動を起こすとは予想していなかったらしく、全てを相手に見られてしまつてゐる鬼灯は今更起きることもできず、こうして寝たふりを続けているのだろう。

全て白澤の想像だが、十中八九間違いないだろう。

試しに横へずらされた禪を指に引つ掛け、さらに緩めてやろうとして引つ張ると、ビクンとわずかに鬼灯の体が動いた。

（起きてる！やっぱり起きてるよ！）

その事実、白澤は地団駄を踏んで喜びたくなつた。頭はいいのに、ちよつと馬鹿なところがある、そんな鬼灯が愛おしくてたまらない。

こうなると、鬼灯がどこまで自分の狼藉を許すかが問題だ。当然目覚めたときには殴打必至だが、当然その覚悟で白澤もいどみかかる。どうせ次のコマになれば怪我などすぐに治るのだ・・・

白澤は鬼灯の半分勃起あがった自身へ顔を近づけ、匂いを嗅いでみる。自分が何をしているのか鬼灯にわからせるため、あえて鼻息をたててやるのも忘れない。

汗のような匂いが少ししているだけで、不快な印象はない。むしろ、眠る前に使っていた湯の香りか、石鹸の香りが強いぐらいだ。

そのまま口を寄せ、舌を出して固く尖った先で裏筋を舐め上げる。

鬼灯自身がヒクリと反応し、鬼灯の足も一瞬ビクついた。

（どこまで寝たふりするのか・・・）

白澤はそのまま同じ愛撫を何度も繰り返し、鬼灯自身が完全に反応するまで続け、先端から先走りをおぼすほどになると、ようやく愛撫をとめて舌をひっこめた。

鬼灯の顔を真上から覗くが、寝顔に変化は見られない。しかし、最初より心なしか頬に紅みが増しているような気がする。

再び鬼灯の足元に戻り、今度は惜しみなく晒し出されている白い足を標的にする。

身体の関係は長年あるものの、長らくは互いに顔を合わせず、ようやく向き合って閨を交わすようになってからも白澤がじっくり愛撫しようとする機嫌を損ねるので、こういう機会でもなければせっかく培った技術を発揮することができないのだ。

鬼灯が愛撫を嫌がるのは、体が敏感で感じすぎるからだ、と言うとても可愛らしい理由だが、そんな反応をされると、そこは強引に押して、泣き喚かせたくなるのが男心と言うものである。

すらりと伸びた白い足に指先を揺れさせ、ゆっくり撫でながら肌の感触を楽しむ。

（おお・・・すべすべ・・・）

足首から膝頭へ、肌に触れるか触れないかの微妙な間隔で指を滑らせてゆく。
何往復かしてやると、強く触れた瞬間、確かに足指がビクンと引きつった。

（感じてる感じてる・・・）

白澤は笑いをこらえ、指をさらに奥へと進めてゆく。白い太腿の外側を指の腹で何度も上下に往復させ、ゆっくりと感じさせてやる。

ベッドの枕元辺りから一瞬息を呑む気配が感じられ、鬼灯が順調に欲情していつてるのを、白澤は笑いを堪えて感じ取った。

（じゃ、こんど内側さわっちゃお・・・）

そのまま指をスルスルと内腿へ滑らせ、滅多に愛撫させてくれない箇所へと辿り着く。

感触は予想以上に良く、膝下よりも肉付きが良い分、弾力があってより滑らかな触り心地の肌に、白澤はゾクゾクと肉欲が湧き上がってくるのを抑えられなくなってくる。

（ううつ、すごくキモチいい・・・今度太腿で挟んで、素股してもらおうかな・・・）

邪念をふくれあがらせる一方で、鬼灯の身体を弄ぶことも忘れない。

膝下と同じように触れるか触れないかの距離で内腿を上下にさすったり、手の甲で撫で上げたり、際どい足の付け根まで指を進めたり、と鬼灯の足を堪能する。

ふと顔をあげると、先程白澤によつて完全に反応させられてしまった鬼灯自身が目にとまり、放置され
たままになっている。

鬼灯 SIDE

(何しにきたんだコイツ・・・とつとどっか行け・・・)

なんだか白澤が含み笑いをしている気配を感じ取り、余計に鬼灯の精神を逆なでる。

すると、あろうことか掛け布団に手をかけ、ゆっくりと捲り上げ始めたのである。

(バカ！バカ！やめろ！何してんだド変態！)

布団をこのまま捲られれば、自慰の真っ最中だった姿を見られてしまう。しかし、動こうかどうか逡巡してしまう。

起き上がって白澤を諫めるのは今のタイミングが最適だが、体が熱っぽくてなんだかダルい。これ以上の暴挙はしてくれるなと願う鬼灯だったが、次の瞬間それはバキバキに裏切られた。

白澤がかなり大胆に掛け布団を捲り上げ、鬼灯の下半身を晒したのである。
当然、下着から露出している性器も外界にさらされてしまった。

（み、見られたっ・・・！見られたっ・・・！）

とんでもなく羞恥がこみ上げてきたが、まだ部屋が真っ暗で白澤の視界に入っていないことを願う。だが、次の瞬間、ずらしていた禪を指にかけられ、グイグイと引っ張られて鬼灯の体が反射的に反応してしまう。

（な、なんてことを・・・！やめろ、やめろ馬鹿！そんなことするな！ああ・・・）

確実に自慰の最中を抑えられ、手まで加えられてしまっている。鬼灯は恥ずかしくてたまらなかったが、自慰の瞬間をみられてしまったせいで起きるに起きられなくなってしまった。

いつも白澤を淫獣、放蕩者、快樂主義者と罵っているというのに、こんな自分を見られて鬼灯は立つ瀬がなくなってしまう。

白澤は反応してしまっている鬼灯自身を見て興味をそそられてしまったのか、フーっと息を吹きかけて柔らかな刺激を与えてくる。

（んんっ・・・息だけでも感じる・・・っていうかコイツやめろっ！）

白澤の吐息がさらに近づき、鼻をすする音が鬼灯の耳にかすかに聞こえてくる。

（まさかコイツ、匂いをかいでるんじゃないっ！へ、変態っ・・・！）

恥ずかしすぎてすぐに起き上がって白澤の行為を止めたかったが、鬼灯の弱みを掴んだ白澤はおそらく開き直るだろう。

起き上がったところで「おまえ自分でしてただろう！」なんて指摘されてしまったら、羞恥のあまり寝込んでしまうかもしれない。

鬼灯は掛け布団で完全に隠れている方の手でシーツを硬く握り、羞恥の極みの時間を堪える。

（ううつ・・・もうやめろやめろ・・・！）

スンスンと自分の香りを嗅ぎ続ける白澤に懇願しながら、ようやく両足の中心から気配が離れる気配がした。

しかし鬼灯が安心した束の間、再び近づく気配があり、次は自身になんらかの刺激が与えられた。

「……………」

自慰を途中で止められたこともあって、鬼灯の性感は高められたまま放り出されて中途半端な状態だった。

そこへ刺激を与えられ、反射的に声が出そうになったが、口を引き結んでなんとか堪える。

（何？指先？）

一体何で刺激を与えられているのかわからない状況が、ますます鬼灯を不安にさせて興奮を高めてゆく。何度も同じ刺激を与えられ、足がビクつくのを止められない。

（もしかして、これ舌・・・先・・・？）

白澤の舌が自分の性感帯を刺激しているのだという事実で、余計に性感が高まって深く感じてしまう。

（はあっ・・・やめ、感じてしまうっ・・・）

快樂に我慢できず腰がヒクヒクと震えてしまうのを止められない。また絶頂の波に乗せられ、再び濡れる感触が自身に広がってゆく。

（やめ・・・も、これ以上はっ・・・！）

寝たフリも限界が近づいたとき、ようやく自身への刺激がとまり、鬼灯は安堵のため息を密かに吐き出す。

人が顔に近づく気配を感じ、息をとめて必死で興奮の呼吸を悟られまいと取り繕う。気配がさり、鬼灯はゆっくりとため息を再びついた。

（コイツ、いい加減にしろっ・・・）

鬼灯が心の中で毒づくのを知らず、白澤は再びさらけ出された下半身へと移動したらしい。

さらけ出された足に微妙な感触を感じ、思わず反応してしまう。どつしりと撫でるのではなく、ふれるか触れないかの微妙な距離において足を撫でられ、むず痒いような、くすぐったいような感覚に足がいちいち反応を返してしまう。

（あんまり動くと、起きているとバレてしまうっ・・・）

そう思っても、体の反応は抑えられない。足は滅多にじっくり触らせないので、慣れない刺激にこらえ方を捉えづらい。

白澤の手は太腿へと移動し、ゆるゆると手のひらで撫で回してくる。

（ううっ！そこ、感じる・・・）

思わず息を飲んでしまい、気取られなかったかと焦ったが、白澤の動きは変わらない。着流しに隠れて滅多にさらさない部分だけに、刺激には慣れておらず、顕著に反応を返してしまう。時折爪で肌を引っ掛けられ、ゾクゾクと足に快感が走り抜ける。

足指が引き攣り、どうしても反応をとめることができない。

白澤の手はさらに触れられない部分である内腿へと伸び、ゆるゆると愛撫をし続ける。

（あっ・・・感じる、感じるっ・・・）

起きていた SIDE

（うわわわ、ヤバヤバヤバ！！金棒百叩きの刑！？）

白澤が後じさつて逃げようとするが、少し違和感に気づいた。

鬼灯から明らかに怒りは染み出しているが、上体を起き上がらせているだけで寝台から起き上がってくる気配が感じられない。

鬼灯の顔をよくよく見ると、ほんのり首元から紅みがさしていて、熱っぽ感じがする。昼間ウスベニアオイに仕込んでいた媚薬が効いているらしかった。

（これはイケるかもしれないな・・・）

白澤がソロソロと鬼灯に近寄ると、鬼灯がどこかひるんだ気配を見せる。その様子が、ますます白澤の気分をつけあがらせる。

「いや、ちょっと鬼灯に用があつてさ・・・昼間渡したウスベニアオイだけど・・・飲んだ？」

「ちよ、ちよつとなんで近寄ってくるんですか。来るな！」

これはいよいよ怪しいと白澤は鬼灯ににじり寄るが、鬼灯はベッドから離れる気配がない。というか、その場から動けないような状態だろうか。

よく見ると、片足が掛け布団から盛大にはみ出していて、日頃お目にかかれない生足がさらされている。

（これはいよいよ怪しいねえ）

「ねえ、飲んだ？」

少しづつ、確実に鬼灯ににじり寄りながら白澤はマイペースで質問し続けている。

「・・・飲みましたけど・・・」

「あ、そう。で、顔赤いけどどうしたの？」

「どうもしません・・・」

むき出しの生足に視線を向けられているのだと察知し、鬼灯はゆっくりと足を掛け布団の中へとしまい込む。

「・・・・・・・・ふーん・・・・・・・・」

白澤はおかしそうにゆらゆらと鬼灯に近づくと、そのまま寝台の上にダイブした。

「なっ！何してるんですか！」

相手の予想外の行動に戸惑いながら、鬼灯はなんだか慌てふためいている。掛け布団ごしに鬼灯の上のしかかり、白澤が顔に迫ってくる。

「どけっ！離れろ！淫獣！」

「淫獣って何・・・？なんか、ヤラシイこと考えてるの？」

「……っ！」

言葉尻を捉えられて、鬼灯が絶句する。ああ言えばこういう性分の鬼灯が言葉につまるなど珍しい。その隙について唇をチョンと重ねると、首を振って逃れられ、頭をぐわしと掴まれ、そのまま左にねじられそうになる。

「うぐぐぐぐ！やめ……やめ……」

声帯が押しつぶされて言葉が出ない。白澤の制止の言葉は耳に入れず、鬼灯は捻る力を緩めない。

首が折れるー！と叫ぼうとしてうめき声しか出せなかったが、苦しさのさなかで片手を掛け布団の中に滑り込ませて、めちやくちに手を動かした。

「っ！」

襦袢がはだけて素肌に指先がふれると、鬼灯は白澤から両手を離れた。

そのまま指を奥へと這わせると、少し膨らんだ硬い突起に触れて、鬼灯の身体が小さく跳ね上がった。

（お、ラッキー！胸だ！）

そのまま指先でクルクルと撫で回すと、鬼灯が息を吞んで鼻から息を漏らした。

「抵抗しないの？」

鬼灯が何か言葉を発しそうになったところで、指先で挟んで強めに引っ張ってやった。

「んぐっ・・・！」

ビク、と鬼灯の身体が再び跳ね上がり、半開きにした口からゆっくり吐息を漏らす。その吐息にかすかに艶めいた熱が絡んでいて、白澤はほくそ笑んだ。

（薬効いてるみたいだね・・・鬼灯可愛い・・・）

白澤は身体を鬼灯から離すと、掛け布団を一気に捲り上げて完全に取り払った。

「あっ・・・！」

鬼灯が掛け布団を戻す動作は緩慢で、指の間からするりと滑り去っていった。

掛け布団を取り払われた鬼灯の姿は、先ほど白澤に乱されて僅かに露出した白い胸に、大きく捲くられて片足が完全に露出し、腰まで頭になっている姿だった。

さらに腰の襦袢がまくり上げられた根元に、下着から露出している鬼灯自身がひどく淫猥に映った。

「あれ？なんで禪から出てんの？」

「うああっ・・・これはっ・・・！」

急いで両足を閉じて中心を隠し、慌てて取り繕うとする様子がなんだか可愛いと感じてしまう。

「もしかして、一人でしてた？」

「・・・・・・・・」

顔を覗き込むと、フイと顔を逸らされる。質問を肯定するその仕草に、白澤の心臓が高鳴った。

「ねえ、してたの？してたの？」

「……！うつさい！黙れ！」

しつこく囁き続けると、案の定裏拳が繰り出され、頭にクリーンヒットして白澤は部屋の隅まで吹っ飛んだ。

白澤が打ち沈んでいる間に、鬼灯は身を正して再び掛け布団をとり、頭からかぶった。

「う、うう……鬼灯ひどいよ……」

家一軒破壊する鬼灯の攻撃をくらっておいで、鼻血一つで済ませる頑丈さはさすが神獣といったところである。グワングワンする頭を必死に奮い立たせ、懲りずに鬼灯へと向かう。

「鬼灯、鬼灯……ちよつと……」

名前を呼びかけるが、鬼灯からの返答は冷たい。

「うるさいです。とつと消えてください」

※続きは製品版でお楽しみ下さい※